

「日本靈異記」訓釈試論(四)

我妻多賀子

四 ソソトモスルコト

国立国会図書館本の「日本靈異記」中巻第二十七話を見ると、「動」の字に次のような訓がついている。

動 伊ヤ可母又云也〃母又云曾〃土毛寸流去止

今回はこの訓釈についてながめてみることにしたい。つまり、ここでは「動」に

- ① イヤカモ
- ② ヤヤモ
- ③ ソソトモスルコト

の三つの訓みが施されているわけである。このうち一番問題のないのは、②のヤヤモであろう。「動」の字は漢籍に例があつて、左に示すように、ヤヤモスレバスナハ

チの意味で用いられている。

凡云動者、即兼動輒之義、乃省文也。(助字弁略)

跋前踴後、動輒得咎。(韓愈・進学解)

同じ「日本靈異記」の前田家本下巻第二十七話にも、左のような訓釈が見える。

動 夜〃母須礼婆

また、「類聚名義抄」、「色葉字類抄」、「節葉集」などいわゆる古辞書の類も、そろって「動」にヤヤモスレバという訓をつけている。

そこで、②の訓みはまず最初に認めて良いと思う。ただ、この「日本靈異記」の例では、ヤヤモスレバという訓みが、ヤヤモとなっている。

この部分、本文に当たると、

国司作是 事咎動有 我等何作

となつていて、訓み下しは、

国の司ヲスラヘニ^ニモ是(カ)ク作(ス)ルヲ、事
の咎(とが)、動(ヤヤ)モ有(あ)らば、我等何

(イカ)ニ作(セ)ム

で、各注釈書が大体一致している。

つまり、ここは強力を示して夫のために国守から手織りの布を取り上げた力女を恐れて、夫の両親がいう言葉であるが、直訳すると、

国守に対してさえもこのような行為に出るのを、事件の罰がもしも何とあるとしたら、自分たちはどうしよう

という意味になる。

結局、この力女は、夫やその両親によって家を追い出されてしまうのであるが、ここでは、「動」の字が下の「有」にかかつて、ヤヤモアラバと訓まれている。つまり、「動」の訓は、ヤヤモということになるが、これについて少し考えてみたい。

まず、ヤヤモスレバに類する語として、他に、ヤヤムスレバ、ヤヤモセバ、ヤヤトモスレバなどの存在が考えられる。

このうち、ヤヤムスレバは、左に記すように、漢文訓読系統の文に用いられている。

動(ヤヤムスレハ) 規矩に合し、心疑滞無くして

(大日経義釈延久承保点)

大小と無く動(ヤヤムスレハ) 枷杖を行ふ

(大慈恩寺三藏法師伝承徳三年点)

また、ヤヤモセバは、中古の和文脈に見えている。

ややもせば枝さしまさる木の下にただ宿り木と思ふ

ばかりを(宇津保物語・楼上・下)

ややもせば消えを争ふ露のよにをくれ先立つ程へず

もかな(源氏物語・御法)

ややもせば下りたちぬべき心地こそすれ(狭衣物語・

四)

最後のヤヤトモスレバは、ヤヤモスレバを強めた言い方で、左のような例がある。

やうがましいでは無れどもややともすれば此樽を取りたがるに依て(虎寛本狂言・千鳥)

ところで、このヤヤトモスレバと同じ意味を持つものとして、ヤヤトモという語が存在している。

何の為なれる我が身といひ顔にややとも物の歎しきかな(内閣文庫本和泉式部集)

右に挙げた例のように、ヤヤトモスレバの他に、ヤヤ

トモという語が、同義語として出て来る以上、ヤヤモスレバに対しても、ヤヤモという語があったことは、まず考えられるところである。

ヤヤトモスレバ↕ヤヤトモ

ヤヤモスレバ↕ヤヤモ

しかも、今でこそ一語の副詞として扱われているが、このヤヤモスレバは、もともと品詞別に、ヤヤ(副) + モ(助) + スレ(動) + バ(助)と分けることができるものである。このうち、はじめの副詞ヤヤは、ヤ(弥)を重ねた語で、程度の盛んであるさまを表わしている。

このヤヤが、他の品詞と結合して任意に使われたために、ヤヤモスレバに類する語として、ヤヤモセバ、ヤヤムスレバなどの語が出て来たのであろう。

そして、必ずしもスレバでなくても、この「日本靈異記」のアラバのように、何か下に条件句が来れば、「動」の字はヤヤモと訓まれて、「もしかしたら……」の意で、自由に使われていたものと思われる。

それが、やがて、下に来る語はスレバ一つにしほられ、ヤヤモスレバという語だけが用いられるようになった結果、「動」の字の訓そのものも、ヤヤモスレバと変わってきたのであろう。

そう考えれば、たとえ文献上に例が見られなくても、

ヤヤモという語が存在していたことは、じゅうぶん納得の行くところである。

以上、「動」の訓として、②のヤヤモをまず認めることにしたい。

続いて、①のイヤカモを見てみよう。

最初に、イヤカモのイヤは、イヨ(愈)の母音交替形であらう。イヤは、物ごとの状態が甚だしいことを表わす語で、また、ヤという形でも使われた。

すなわち、これは、先に見たヤヤモのヤ(弥)と同じである。このヤ(弥)と同義のイヤに、疑問の意を表わす係助詞のカ、それに詠嘆の意を持つ、同じく係助詞のモがついて、イヤカモという語が成立したものと思われる。

ヤヤモは、副詞のヤ(弥)を重ねた上に係助詞のモがついた語であるから、イヤカモと、その語構成がきわめてよく似ている。

ヤヤモもイヤカモも、「もしかしたら……」の意味で、同じように使われていたのではないだろうか。

ただ、このイヤカモという語は、「日本靈異記」のこの訓に見られるだけで、他の文献には、全く出て来ない。また、ヤヤモの時とちがって、これに類する語も他に見出し得ない。

しかし、右のように分解してその成立を考えれば、ヤモという語があったとする以上、イヤカモの方の存在を全く否定するわけにはいかないと思う。

よって、ヤヤモと同じく、実例は見出せないながらも「日本霊異記」の「動」の訓イヤカモは、ひとまず認めることにしたい。

最後に、③のソソトモスルコトについて考えてみることにしよう。

さて、このソソトモスルコトを見てもまず気のつくことは、前のイヤカモ、ヤヤモに比べて、よく整った長い訓だということである。

そこで一つ、ソソトモスルコトのスルコトには、先のイヤカモ、ヤヤモもかかって行き、それぞれ、イヤカモスルコト、ヤヤモスルコトという訓であったのではないかという疑問が湧く。

つまり、「又云」でつないで、①、②の訓の後半は省略し、最後の③で、まとめて書いたとするのである。

①イヤカモ又云②ヤヤモ又云③ソソトモスルコト

しかし、この考えは、どうも取り入れることができない。というのは、「日本霊異記」の訓釈を見ると、一語に二つまたは三つの訓みがあって、それを「又」とか「又云」でつないで示す場合、左に記すように、必ず

語尾まできちんと整えて書いているのである。

胃 波爾加美又云伊岐々美 上二

睥 女カリウツ又云メミス 上二

奇 女ツラシク又阿也シ支 上四

乞勾 カタキ又云保甘比止 上四

愈 伊由る己止又云ヤ須牟己止 上十六

秀 勝也須久礼尔多留又云備伊竺尔多流 中二

拆 部之天又云和可知天 下序

右に挙げた例から推して、イヤカモ、ヤヤモ、ソソトモスルコトという三つの訓も、それぞれ独立したものであったと考えることができる。

次に、もう一つ、ソソトモスルコトは、表記上整えられてはいるが、実際には、ソソトモスレバ、ソソトスレバなどと、条件句のようにして用いられていたのではないかという疑いも持たれる。つまり、最後にコトで結んだ訓は、あくまでも訓釈を表わすためのものであって、本文に即してみれば、語尾はもっと自由に変化した形であったのではないかとするのである。

しかし、これもまた、取り入れられない考えのようだ。すなわち、コトのついた訓について、実際の文に当たってみると、左に記すように、コトがついたままで訓んだ方がスムーズに行くものばかりなのである。

イユルコト 終に愈（イ）ユルコト得不（ず）、
 叫び號（おら）びて死ぬ 上十六
 コバムコト 逆（ムカ）ひ拒（コバ）ムこと得不
 （ず）して 下六
 ハレタルコト 両（ふた）つの乳脹（ハ）レタル
 コト大きにして 下十六
 マサナルコト 自性（ひととなり）鹽醬（マサナ
 ルコト）ヲ心に存す 上十三
 モダアルコト 居て心に思ふに、默然（モダア）
 ルコト能は不（ず） 上序
 ヤムコト 粵ニ起ちて自（みずか）ら見るに、忍
 び寝（ヤ）ムコト得不（ず） 上序
 ワラフコト 幸（ムガ）シクモ嗤（ワラ）フコト
 勿（な）かれ 上序
 右の例から考えて、やはり、従来言われているように
 「靈異記の訓釈は本文訓読に即した注釈」（注1）であ
 るようだ。よって、このソトモスルコトについても、
 コトのついた形を尊重し、本文に即して訓み下せば、ソ
 トモスルコトアラバとなる。
 以上二つのことから、「動」の字には、イヤカモ、ヤ
 ヤモの外に、ソトモスルコトという訓があったとし、
 続いてその意味を調べてみることにしたい。

ソトモスルコトは、これを語分解すると、ソソナト
 （助）＋モ（助）＋スル（動）＋コト（名）となる。
 このうち問題となるのは、最初のソソであるが、これ
 には、左のような四つの意味が考えられる。

- ① 代名詞ソを重ねた感動詞。そら。それそれ。
- ② そわそわ、せかせか、ざわざわなどの意を示す語。

③ 水の流れる音、かかる音、散る音などを表わす。
 ④ 静かに吹く風の音などの形容。さやさや。そよ。
 右のうち、ソトモスルコトのソソと関連した意味を
 持つものはどれであろうか。一つずつ吟味してみること
 にしたい。

まず初めに、①のソソであるが、これは、「蜻蛉日記」
 や「今昔物語」に例が出て来る。

時しもこそあれ、あなたに人のこゑすれば「そそ」
 などの給に（蜻蛉日記・上）
 未の時ばかりにさきおひのゝしる。「そそ」など人
 もさわぐほどに、ふとひきすぎぬ（蜻蛉日記・中）
 南殿ノ方ヨリ歌ヒノシリテ来（キタ）ル音（コエ）
 ス。「ソゝ、来（キタリ）ニタナリ」ト集（アツマ
 リ）テ（今昔物語・二八ノ四）

代名詞のソは上代からいくつも例が見えているが、そ

れを重ねたソソという語は、右に挙げたように、平安時代にならないと出て来ない。しかも、用例が少なく、その用法も会話文に限られているところから、ソソトモスルコトのソソが、このソソと同じものとは、まず考えられない。よって、①は、ひとまず除外する。

次に、残った②③④は、いずれも擬音（声）語とか擬態語、いわゆるオノマトペと呼ばれているものである。擬音語とは、外界の音を写した言葉で、この中では③と④が該当する。一方、音をたてないものを音によって象徴的に表わす言葉が擬態語で、②がこれに当てはまる。

さて、この②③④のソソをすべてひっくり返して、語源的に一つのものとする説もある（注2）が、果たしどうであろうか。

まず②のソソであるが、これは、下に接尾語のキがつくとソソキ（噪キ）という四段活用動詞になる。

このソソキは、せかせかと仕事をする、ざわざわと音を立てる、繊維がけばだつなどの意を持つ動詞で、中古の文学作品に用例が多い。上代では、その名詞形が「祝詞」の大殿祭に出ていて、そこに、左のような注がついている。

取葺ける草（かや）の噪岐（古語云蘇蘇岐）無く
右の注に使われているソ（蘇）は甲類の仮名である。

一方、ソソトモスルコトのソは乙類の仮名曾で書かれている。したがって、ソソトモスルコトのソソとソソキ（噪キ）のソソとは別語であることがわかる。

次に、③は、②と同じく、やはり接尾語のキがつくとソソキ（注キ）という動詞になる。これは、第三拍目が濁音化してソソギ（注ギ）となっただけであるが、現在でも盛んに使われている語である。もちろん、上代の文献にもいくつか用例が出ては来るが、一字一音書きのものは少ない。

美那曾曾久（ミナソソク） 臣の嬢子（記歌謡・一）

○三

彌儼曾曾矩（ミナソソク） 鮪（しび）の若子を

漁（あさ）り出な猪の子（紀歌謡・九五）

淋灑 以水附於物之良 散也 水下也 曾々久（新

撰字鏡）

需（ハ）曾々久（日本霊異記・上二五）

右の諸例でわかるように、このソソキ（注キ）のソソは、ソソトモスルコトのソソと同じ乙類の仮名曾で書かれている。意味的には、このソソキ（注キ）は、音をたてて水が流れる、雨・雪などが間断なく降ることなどで、ソソトモスルコトとの関連は、むしろ薄いように思われる。しかし、同じ乙類の仮名で書かれている点は注

目される。

ソソキ（噪キ）のソソとソソキ（注キ）のソソは上代でも甲乙別個の仮名で書かれているが、それ以後も「類聚名義抄」などを見ると、アクセントが相違している。

よって、ソソキ（噪キ）とソソキ（注キ）は、完全に別語であったと言える。

ソソトモスルコトのソソは、意味的にむしろソソキ（噪キ）に似ているが、双方に関連はなく、かえってソソキ（注キ）の方に近かったと言えそうである。

最後に④のソソであるが、これは、左に記すように、平安時代の歌に、多く見えている。

萩の葉に風のそそ吹く夏しもぞ秋ならなくに哀なりける（為相本曾丹集）

萩の葉にそそや秋風吹きぬなりこぼれやしぬる露の白玉（詞花集・四）

鳥の一声鳴き、風のそそと吹くにも（無名抄）

秋風はそそはだ寒しいざこよひもが衣手引かさねてん（新撰六帖・五）

右はいずれも、風の吹く音をソソと表わし、その用法もよく似ている。ところで、上代では、この④に当てはまるものとして、左の例を挙げたい。

倭は 彼々茅原（ソソチハラ） 浅茅原 弟日 僕

らま（紀歌謡・八三）

この歌の二句目ソソチハラは、ソソを④の意味にとれば、さやさやと音を立てる茅原という、いわば国ほめの言葉になる。これについては、「彼々」を表意文字と見てソソノチハラと訓み、あちこちのチガヤノ原とする説もある。しかし、ソソという語が「あちこちの」の意を表わす例は他になく、まずこは、「さやさやと音を立てる」とした方が、穏当な解釈と思われる。

もう一つ、同じ「日本書紀」に、ソソキノという地名が出て来る。そして、ソソチハラの方が訓仮名で書かれていたため、はっきりしなかったが、このソソキノでは、ソソに乙類の仮名が使われている。ただ、地名なので断定はできないが、あるいは、これも④のソソと関係があるかもしれない。

層増岐野（神功前紀）

ところで、この④のソソは、意味的に見て、ソソトモスルコトのソソに最も近いもののように思われる。

先に見たように、①および②が、ソソトモスルコトのソソと無関係の語だとすれば、必然的に③と④をこのソソに関連づけて考えざるを得ない。つまり、ソソトモスルコトのソソは擬音語なのである。これは、ヨーロッパ語と比べると、日本語では、擬音語が「助詞の『と』と

共に副詞的に用いられることが多い」(注3)ということからしても、納得のいくところである。

要するに、ソントモスルコトのソノは、原義的には、風がそよそよと静かに吹く音や水がさらさらと流れる音を形容するものであった。それが、やがて、ちょっと動いた様子とかわずかにゆれた状態を示すようになる。そして、「日本霊異記」のこの訓では、ちょっと動いたこと、ひよっとしたことが、下に条件句を伴って、「ひよっとしたら」「もしかしたら」の意味に変化して行ったものと思われる。つまり、このソントモスルコトは前のヤヤモ、イヤカモとはほとんど意味上の相違はないと見て良いうだ。このことは、先に何例か掲げたが、「又云」でつないだ訓が、それぞれ別の意味を表わすものではなく、似たような言葉を示していることから推してもうなずける。

なお、「日本霊異記」の国立国会図書館本では、傍注が多く、この部分も左のようになっている。

作是(カクシテ)事咎(トカメ)動(カス)有

これは、小泉道先生が既に言われているように(注4)「後注を無視した傍注」として、今回は問題にできなかった。

以上、ヤヤモ、イヤカモ、ソントモスルコトの三つの

訓について、私なりの考えを述べて来たが、いずれも例証が得られず、推量の域を出ない。ただ、「もしかしたら」の意で、これら三語が存在した可能性はかなりあると思う。大方のご叱正を期待して、今回はこれで筆をおくことにしたい。

(注1) 小泉道「三昧院本霊異記の訓釈」(「国語国文」昭和四一年五月号)

(注2) 日本古典文学体系「日本書紀上」五二二頁頭注

(注3) 日本語講座第四卷『日本語の語彙と表現』大修館書店、昭和五一年二月二〇日発行、一一八頁所収、泉邦寿「擬声語・擬態語の特質」

(注4) (注1)に同じ